

---

## 第三王女のカエル様 小ネタ集

romewo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第三王女のカエル様 小ネタ集

### 【Nコード】

N9443M

### 【作者名】

romewo

### 【あらすじ】

『第三王女のカエル様』の小ネタです。過去のWeb拍手のSSなどをこちらにアップしていきます。残念ながら、本編を読まれない方には何のことやら分かりません。ご注意ください。

## 小杉祐輔の眩き その1（前書き）

澄香（本編主人公）の元彼（自称フェミニストのモテモテナンパ男）の眩き。

Web拍手のお礼SSだったものの再録です。

## 小杉祐輔の眩き その1

宮本澄香は奇妙な女だ。

二年くらい前になるか。二人の関係が恋人という時期もあった。期間は確か三ヶ月と8日と5時間36分。

澄香の方からつき合ってくれといってきた、俺の方から別れを告げた。

ま、オレとしちゃあ、いつものパターンだ。

オレは、こういつてはなんだが、ハッキリ言ってもてる。

顔もスタイルもよくて、フェミニストだから、女が放っておかないのだ。

恋人がいると分かっている、女達は言い寄ってくる。

当然恋人は嫉妬する。

自分だけを見てくれと、自分だけに優しくしてくれと言ひ募る。

束縛されるのが嫌いなオレは、そんな女に別れを告げる。

捨てないでと、浮気してもいいから別れないでくれと追いつがられることは毎回だ。

周りの男達は、

「モてる男は大変だな」

などと言いながら、嫉妬と羨望の眼差しを向けてくる。

けれど、モてるのは、オレの責任じゃない。

向こうが勝手に好きになるんだ。

だから。

澄香に二度捨てられかけたことは、絶対に内緒だ！

小杉祐輔の眩き その2（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものの再録です。

## 小杉祐輔の眩き その2

宮本澄香と初めて会ったのは、大学に入学して間もない飲み会でのことだった。

いくつかの文化系サークルの有志による飲み会ということにはなっていたが、実態はどう見てもコンパだった。

オレはそのサークルのどこにも入ってなかったが、同じ学科の篠崎に誘われたのだ。

オレはよくコンパに出てくれないかと頼まれる。

オレが出るとなれば、女達の集まり方が違うからだ。

いくらフェミニストのオレだって一度に何人も相手できるわけじゃない。つまり、オレのおぼれに預かるうってハラだ。客寄せパンドになるのは気が進まないが、モテない男達の涙ぐましいパフォーマンスを無碍にする程、オレは薄情じゃない。

だから、その日はデートの約束があっただけど、相手は特別好みつてわけじゃなかったから快く参加してやることにした。

美人と噂に名高い法学部の松山恵美子に参加するということも、まあ一因であることは否定しない。

噂通り、松山恵美子は、ちょっと見ないくらいの美人だった。

透き通るような白い肌、今時珍しい真っ直ぐな黒髪、涼しげな目元、長い睫、赤い唇。

殆ど化粧つけのなくせに、周りの女達が霞む程美人だった。

松山恵美子を目にした瞬間、その夜のオレのターゲットは決まったも同然だった。

その時、宮本澄香は松山恵美の隣にいたのだが、最初オレは全く気がつかなかった。

ただ、松山恵美子の隣にいるから、自然に視界には入った。

美人の松山に比べて、澄香は平凡で、共通点はなさそうに見えた。だから、たまたま隣になっただけだと思っていた。

宮本澄香は完全にオレの好みから外れていた

オレはフェミニストだから、正面に座った女のつまらない世間話にも、愛想良く受け答えしながら、どうやって桧山恵美子を落とそうかと考えた。

コンパも盛り上がってきて、席をシャッフルしようということになった。

オレはすかさず、桧山の隣を目指した。

しかし、オレより先に経済学部の方藤ってヤツが桧山の隣に陣取るうとした。

方藤はオレよりは劣るが、そこそ顔がよくて話題が豊富だから、そこそこモテる。

だがそこへ、法学部の伊勢崎が割って入ろうとした。

その時、二人が巫山戯て小突き合った拍子に、隣の女子に体が当たってしまった。

それが宮本澄香だった。

「うおっ」

と、澄香が女らしくない声を上げた瞬間。

方藤と伊勢崎は吹っ飛んでいた。

ガシャ————ン！

派手にテーブルの上の皿やコップが倒れ、あちこちに散乱した。

一瞬何が起こったのか分からず、誰もが固まった、その時。

「このくそガキども、貴様のピーをピー——でピーして、ピーがピー——になるまで、ピー——」

「ッ」

桧山恵美子の形の良い唇から、聞くに堪えない罵詈雑言が飛び出したのだ。

「恵美、マジでウケるわっ」

アハハハハハハハハ。

と、その場で笑ったのは、宮本澄香唯一人だった。

オレも含めた他の連中は、たった今自分が耳にしたことが現実として受け入れられず、ひたすら戸惑っていた。

「ちつ。タダメシ食えるってんで、来てやったのに。料理は大したことねえし、酒は薄いし。女は香水付けすぎて臭いし。男共はピーチクパーチク五月蠅いし。スミ、瞬兄に迎えにきて貰うから、ウチ帰って飲み直そうぜ」

「えゝ、この惨状、どうすんのさ」

宮本澄香の常識的な言葉に、松山恵美子は涼しげに問い返した。

「ワタシのせいかな？」

「それは、見方によるんじゃない？ その二人に、聞いてみたら？」

澄香の指差した先にいたのは、工藤と伊勢崎。

二人とも、未だ倒れたまま怯えきつた目で松山恵美子を凝視していた。

それはまるで「金色夜叉の寛一がお宮を足蹴にする」の図のようだった。

男女が完全に入れ替わってはいたが。

「おい、ワタシのせいかな？」

松山恵美子の鋭い声に、工藤と伊勢崎はブルブルと首を振る。

「いえっ！ 滅相もない！」

「僕らが、悪いんです」

工藤と伊勢崎は我先にと、自分の非だと言い募った。

「じゃあ、土下座しなっ」

「え？？」

流石にそれはプライドが許さなかったらしい。一瞬反抗的な表情が浮かんだ。しかしそれも、松山恵美子の一睨みで失せてしまったが。

「土下座はもう見飽きてんじゃないの？」

二人を庇っているともいえなくもない言葉に、工藤と伊勢崎が絶

るように澄香を見た。

と同時に、桧山恵美子が土下座させるのはよくあることだと知れて、他の連中も何とも言えない表情になる。

「まあ、確かにねえ」

その時、工藤と伊勢崎はほのかな希望を見たに違いない。

しかし、桧山恵美子は、そんなに甘い人間ではなかった。

「じゃあ、鼻の穴に割り箸つつこんだまま往復ビンタ×十五つてので済ませてやるか」

「済ませてやる」と言っているはずなのに、余計酷くなっているのは気のせいではないはずだ。

第一、×十五というのはどういう意味なのか？ 単純に考えれば、往復ビンタ十五回ということだが、十五倍ということかもかもしれない。十五倍だったとして、一体何に対してなのか？

その場の人間は、きっと同じ疑問を持ったことに違いない。

「×十五って何？」

宮本澄香の問いかけに、誰もが内心で頷いた。

しかし桧山恵美子の返した答えは。

「だって、今日、十五日じゃん」

聞きたい答えはそうじゃない。十五の由来ではなく、十五の意味だ！

誰もが心の中でつつこんだ。

けれどそれは、宮本澄香には届かなかった。

「ああ、なるほど」

って！ 何故そこで納得なのか！？

その時、皆の心は一つになった。

そのお陰で後々このメンバー（桧山と澄香を除く）で集まることになるのだが、それはまた別の話だ。

「って言ってるけど、どうする？ プライドを守りたかったらビンタでえ、命を守りたかったら土下座かなあ」

冷静な澄香の意見に、真っ青になった工藤と伊勢崎は、慌てて居

住まいを正した。

「ど、土下座します！！喜んで！土下座します！！」  
言いながら、既に頭を床につけている。

要するに、二人とも土下座してしまったのだ。

「今後は、許可なくワタシの視界に入らないように」

「はい！ 畏まりました！」

その時のメンバーは、後々になっても決して工藤と伊勢崎を弱虫だとか軟弱だとかは言わなかった。

なぜなら、桧山恵美子の武勇伝は、始まったばかりだったからだ。他の連中は気づかなかったが、オレは気づいた。

桧山恵美子が怒ったのは、宮本澄香のためだと。

その時初めて、オレは、宮本澄香という人間に興味を持ったのだ。持たなければ、オレの学生生活は薔薇色だったろうにと。

何年経っても思うことになるうとは、オレは全く予想だにしていなかった。

## 小杉祐輔の弦き その2（後書き）

長い「ピー」って自動で折り返してくれないんですよね。

## ケロレンジャーの一言迷言集 その1 (前書き)

Web拍手のお礼メッセージだったものです。



## ケロレンジャーの一言迷言集 その1（後書き）

ケロタン達の性格を想像してください。

でもこれが全部同じ人間がやってると思うと、ちょっと怖いような  
気がします（ - - ; ）。。

## 小杉祐輔の眩き その3（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものの再録です。

### 小杉祐輔の眩き その3

宮本澄香に告白されたのは、梅雨真っ直中のある午後のことだった。

視界が霞む程だだ降りの雨の中、オレは午後一の講義が急に休講になったせいで時間を持て余していた。

多分、時刻は十三時三十二分頃だったと思う。

宮本澄香とばったり出くわしたのは。

澄香は水色に白の水玉の傘を差して、ベージュのウィンドブレーカにジーンズ、カーキーのレインシューズという出で立ちで、降りしきる雨に悪態をついていた。

「死ね！ 雨！ 死んでしまえ！」

雨に死ねというのは、無理な話だろう。

そもそも雨は生きてはいない。

宮本澄香はオレに気づいて、こちらを見た。

ああ、この目だ。

オレは思った。

合コンで何度か同席した時に、澄香はいつもそんな目をしオレを見ていた。

オレはモテる。

女経験も豊富だ。

だからオレは、女達の向けてくる感情には聡い。

好意なのか、嫉妬なのか、性欲なのか、

なのにオレには、澄香の視線の意味がサッパリ分からなかった。

その点、桧山恵美子の視線は分かりやすい。

オレとしては屈辱的なことだが。

桧山のオレを見る目は、石ころを見るそれと同じだ。

そこには、軽蔑の感情すらない。

一欠片の興味もないからだ。

だが、桧山の噂を聞くにつれ、それでいいのだとも思うようになった。

連れて歩くには自慢になる女だが、そんなことをしようものなら命の方が危ないことは明白だった。

工藤や伊勢崎は、未だに桧山の名前を聞くだけでブルブルと震える程だ。

ところがこの宮本澄香の目はどうだろう。

オレを見ているようでまるで見ていないような視線。

それでも確かにオレを見ていると思わせる。

「小杉祐輔。丁度良かった」

宮本澄香がオレに言った。

「何か用？」

フェミニストのオレにしては、随分と素っ気ない返事だったが、澄香は全く気にしていないようだった。

「そうだな。三ヶ月くらいでいいか。アタシとつき合ってよ」

まるで熱のこもっていない告白とも言えない告白だった。

この時ですら、澄香はオレのことを好きだとは言わなかった。

そして、後にも先にも、澄香がそう言うことはなかった。

「なんで、オレがお前なんかと」

オレは嘲笑ってそう言うつもりだったのに。

「いいよ」

気が付いたら、何故かそう答えていた。

小杉祐輔の眩き その4（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものの再録です。

## 小杉祐輔の眩き その4

澄香とつき合うということになって三日間、澄香からは何の連絡もなかった。

ひよつとして「つき合つてよ」というのは、映画だとか散歩だとかにつき合ってくれという意味だったんだろうかと、オレは思い始めすらした。けれど、澄香は「三ヶ月」と言った。まさか三ヶ月間映画につき合えという意味ではないだろう、と思い直す。

今までの経験から言えば、つきあい始めると、女つてヤツは早速オレを所有物扱いで、我が物顔にオレの時間を独占しようとするものだ。

それを上手くあしらうのも、プレイボーイたるオレの手腕の見せ所だが。

あの素っ気ない風だった宮本澄香が、どんな風にオレを独占したがるのか、ちよつとした見物だと思っていた。

なのに何故連絡がない!?

いや、男慣れしてなさそうな澄香のことだ。

ひよつとしたらオレからの連絡を待っているだけかもしれない。

ならばここは一つ、オレの方からリードしてやらねばならないだろう。

そう思ったものの、オレは澄香のメアドを知らなかった!

そうだ、あの時。

オレは澄香に自分のメアドを赤外線送信で教えたけど、澄香のメアドは聞かなかった。

オレからは連絡するつもりはない。

そう言外に宣言するつもりで。

それは即ち、オレはお前のことなんか何にも思っていないんだと、言いたかったからであって。

決して「いいよ」と言つた自分の気持ちが変わらなくて、テンパ

ツてたわけじゃない。

休講なのに「次の講義があるから」とそそくさと立ち去ったのは、勿論同じ理由からで、「いいよ」と言ったオレをビックリしたみたいに見つめた澄香の視線から、逃れるためじゃない。

でも今考えれば、フェミニストとしてはあるまじき行為だった、かもしれない。

澄香はどう考えても、男慣れしてない。

ひよっとしたらあの素っ気ない「告白」も、緊張の余りそうなっ  
てしまったのかもしれない。

となれば、今現在悶々としているべきなのは、オレじゃなくって  
澄香の方ってことになる。

うん、多分きつとそうに違いない。

そう考えると、なんだか可哀想なことをしたな。

オレがそう結論づけた時。

澄香からメールがあつた。

『今晚暇？』

女子とは思えない、絵文字も何もない素っ気ない文面だった。

『悪い、先約がある』

オレは直ぐさまそう返事した。

本当は予定なんかなかった。

午前中合コンに誘われたが、断ったばかりだった。

勿論、澄香から何か連絡があるかと思ってたわけじゃない。

女子のレベルが期待できそうにないメンバーだったからだ。

けれど、こんな素っ気ないメールに速攻で「暇だから食事にも  
行こうか」なんて返したら、如何にも連絡を待っていたみたいじゃ

ないか。

だがひょっとしたら、澄香は勇気の文を振り絞ってメールしてきたのかもしれない。

メールの文面が素っ気ないのも、照れ隠しと見えないこともない。今時男でも絵文字の一つや二つを使うものだ。

それを敢えて使わないのは、初心な気持ちの表れだろう。

とすれば、何だか可哀想なことをした。

オレはさっきも同じ事を思ったことに気が付いて、どうにも気まづい気持ちになった。

そもそもオレはフェミニストなんだ。

女子には優しい。

恋人には特に優しい。

女子に素っ気ない態度を取ってしまったて、心が痛まないはずがない。

澄香相手にいつもの調子が出ないのは、澄香が今までつき合ってきた遊び慣れた女とは違って勝手が分からないからだ。

中学の時、初めて女子とつき合ったときだって、まだ気が利いていたはずだ。

尤も、相手は高校生だったから、勝手が違うといえは違うんだけど。

オレは『先約はキャンセルしたから、夕飯食べよう』と、メールすることにした。

ところがオレはどの絵文字を使うべきか迷ってしまった。

「ハート」は、ちょっと初心者には重いかもしくない。

絵文字を使うことを照れた澄香には、特にそうだろう。

だったらここは、「笑顔」でいくべきだろう。

けどその後に「ピース」は入れるべきか？

けど、それじゃあオレがまるで澄香と食事することを物凄く楽しみにしてるみたいじゃないか。

先約をキャンセルしたのは、彼女に対する義理からで、特別気持

ちがあるワケじゃない。

ということを表現するのに適した絵文字はどれだろう??

オレは悩んだ。

メール打つなんて話すのと一緒に、気楽に打てばいい。

何時もそうしてきたのに。

そもそも、メール打つのに一々深く考えたこともない。

何故オレは悩むのか。

そのことに、更に悩んだ。

すると、澄香から返信が来た。

ひよっとしたら、残念がつてるのかもしれない。

恨み言の一つでも、書いてあるかもしれない。

怒った絵文字が入ってるかもしれない。

もしそうなら、「仕方がないな。先約はキャンセルする」と返してやろう。

うん、それならオレの面目も保たれる。

そんなことを思いつつ、恐る恐るメールを開けたら。

『アタシも約束できたから、じゃあまた今度』

絵文字一つない事務的な文面に、オレは何故か途方に暮れた。

## ケロレンジャーの一言迷言集 その2（前書き）

Web拍手のお礼メッセージだったものです。

## ケロレンジャーの一言迷言集 その2

### ■ケロタン一号アンドリユーの場合

「『後悔』？ それは何だ？ 美味いのか？ よく分かんが、今度お取り寄せしてみよう。なんとこの俺が知らぬ珍味があるとは。是非とも一度口にしてみたいものだな」

### ■ケロタン二号クリスの場合

「僕以外の男なんて滅ばいいと思うのかつて？ いいや、思わないよ。ゴミにも劣る彼らにだって存在意義はあるからね。だって考えてみたまえよ。彼らがいてこそ、賢く美しいこの僕が引き立つてもんだろっ？」

### ■ケロタン三号ディーの場合

「もしリズを傷つけたりなんかしちゃったら、臓腑という臓腑を生きたままえぐり出して鯉のエサにしてあげちゃうんだから」

### ■ケロタン四号ミリーの場合

「パッチワークに凝ってるの。今作ってるこのベッドカバーはちょっとした大作よ。でもね、人間の生首を如何にリアルに表現するかが、とっても難しいの」

### ■ケロタン五号サウザの場合

「……………『現実』とは妄想の一種に過ぎん」



ケロレンジャーの一言迷言集 その2（後書き）

「なろう」ではタグが仕えないので、文字の色分けできないのがちよつと残念ですね。

ケロレンジャー流超解説 小倉百人一首 第一首（前書き）

Web拍手のお礼ネタだったものです。

ケロレンジャー流超解説 小倉百人一首 第一首

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ わが衣手は 露にぬれつ  
つ（天智天皇）

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ミリー「これは、秋に刈り取った稲の夜番をしている時の歌ね。仮  
小屋の苫が荒いので夜露で袖が濡れると詠っているのよ」

リユー「苦って何だ？」

ミリー「苦というのは、茅や菅で編んだムシロのことよ。仮小屋は  
それで作られたものなの」

リユー「ムシロって何だ？」

デイー「そんなことも知らないの？ 針のムシロのムシロよう」

リユー「む。針で出来ているのか？」

クリス「いやだなあ、菅や茅で出来てるとミリーが言ったじゃない  
か」

リユー「デイーは針と言ったぞ」

デイー「ふふ。拷問の時は針で出来たのを使うのよう」

リユー「この男は拷問されているのか？ 夜番は拷問の一種なのか  
？」

ミリー「リユー…、夜番は拷問ではないわ」

リユー「だがデイーが」

クリス「デイーの言うことを一々まともにとってたら、話は進まないぜ?」

デイー「あら、失礼ねン」

クリス「君、リユーを混乱させて面白がってるだけだろう?」

リユー「そうなのか?」

デイー「そうよン。悪い?」

リユー「いや、悪くはないが」

クリス「……………悪くはないんだ」

デイー「じゃあ、いいじゃない」

クリス「うゝん、リユーがいいんのなら、いいのかなあ?」

バコツ。

ミリー「良いわけないでしょう。話が進まないじゃない」

クリス「い、痛いよ、ミリー!」

ミリー「私たちの体が、痛いはずがないでしょう」

クリス「そりゃそうだけどさあ」

ミリー「それはそうと」

クリス「え? 無視なの?」

ミリー「サウザ。貴方、どうして、先程から何も話さないの?」

サウザ「……………この歌は妄想の産物だ」

サウザ以外「……………」

デイー「あ、そういえば、作者は天皇だもの。確かに夜番なんてしないわね」

クリス「なるほど、それで空想の産物と言っただね」

サウザ「……………妄想の中で愚痴を言っている」

ミリー「どういうことかしら?」

サウザ「夜露で袖が濡れると文句を言っている」

クリス「ああ、そういう解釈」

デイー「妄想の中で愚痴るなんて、このヒト、電波なの?」

リユー「袖が濡れるのが、そんなに嫌なのか??」

クリス「いやいや、そうじゃないよ。袖が濡れるというのは『泣い

ている』ことを暗喩してるのさ」

リユー「夜番がつらくて泣いているのか？」

ディー「何ソレ、おっとこらしくない」

クリス「いや、僕が思うにね。夜中に逢い引きの約束をしてたのに、彼女が来なかったことを嘆いているんだと思うよ」

リユー「なんでそんな所で逢い引きするんだ？ 恋人同士なら堂々と会えばいいだろう」

クリス「きつと相手は人妻なんじゃないかな」

ディー「あ、このヒト、弟の嫁寝取ったって噂がなかった？」

クリス「額田王のことだね」

ミリー「それはあくまでも噂であって、史実かどうかは怪しいですよ」

ディー「えゝ、そうなの。つまんなゝい」

クリス「ディー、君、不倫は文化だなんて言い出すんじゃないだろうね」

ディー「いやあねえ、そんな事言うわけないでしょ」

クリス「でも君、靴下履かないだろう？」

ディー「アンタだって、履かないじゃないっ。っていうか、アタシ達全員靴下履いてないわよっ」

クリス「あっはっはっはっは。そりゃそうだ」

リユー「……人妻だろうが何だろうが、約束をやぶるような女とは別れるべきだと思うが？」

ディー「きつと旦那さんに見つかったのよ。きつと翌朝は泥沼よ！」

クリス「僕には彼女の気持ちがかかるような気がするよ。だってさ、夜露が染みこむ様な粗末な小屋に女性を呼び出すなんて、デリカシィに欠けすぎてどうかしてるもの」

リユー「む。それは確かに」

ディー「アタシもやあよ。そんなとこで逢い引きするの。でもさ、ソレ全部妄想なんでしょ？ チョーウケるんだけど」

ミリー「コホン。そもそもそういう歌ではないのよ」

リユー、クリス、デイー「ええ？ 違っの！？」「」  
ミリー「藤原定家によれば、夜の静寂さを表現した余情溢れる歌だ  
そうよ」

リユー、クリス、デイー「……」「……」「」

サウザ「……百姓の苦勞を分かっていない」

デイー「そうよね」。實際夜番してる身には、余情どころじゃな  
いわよね」

リユー「そもそも夜番が必要なのは、夜盗がでるからだろう？」

クリス「治安もろくに取り締まれてないのに、暢気なもんだねえ」

デイー「そんなんだから、死んだ後に弟と息子で内乱させちゃうの  
よっ」

クリス「二人には、争わないという選択肢もあったと思うけどね」

デイー「何言ってるの。人間は戦争をする生き物なんだから、機会  
があれば幾らでもしちゃうでしょっ」

リユー「戦いには男のロマンがあるのだ」

バキッ。

リユー「痛くはないが、殴っても何にもならんぞ、デイー」

デイー「五月蠅いわねっ。戦いで傷ついた内臓なんて、美しくない  
でしょ！」

クリス「それもどうかと思うよ、僕は」

ミリー「……ではそろそろ意見も出尽くしたようですし」

ミリー以外（（無理矢理話まじめに入った！））

ミリー「この歌についての総括を」

リユー「男なら愚痴を言うな！」

クリス「うーん、僕は不倫はしない主義だから」

デイー「夜盗に襲われちゃえば？」

サウザ「所詮、全ては妄想だ」

ミリー「なるほど、全く手前勝手な感想ね」

デイー「そういうミリーはどうなのよ」

ミリー「こんな歌、どうでもいいじゃない」



ケロレンジャー 流超解説 小倉百人一首 第一首（後書き）

「なろう」だと、文字の色が使い分けができないので、ちょっと読みにくいですね。

小杉祐輔の眩き その5 (前書き)

Web拍手のお礼SSだったものです。

## 小杉祐輔の眩き その5

澄香からの素っ気ないメールの後、オレは姫路に連絡した。

予定が変わったから、今夜の合コンに参加してやっても良いと。

姫路は喜んでオレの申し出を受け入れた。

これでS女の東さんが来る！

とか電話の向こうで誰かに言っていた。

S女の東樹里亜というのは、桧山恵美子とは全く違うタイプの美人だ。

直接会ったことはないが、誰かが撮ったらしい写メで見たことがある。

桧山が純和風で透明だけど硬質な雰囲気なのに対して（中身の硬度はダイヤモンドより硬そうだが）、東はどこかしこも柔らかそうだ。

噂によると、ハーフだかクォーターだからしい。

実際、東は色素が薄い。

樹里亜という日本人にはどうかと思う名前も、それなら頷ける。

その東が来るのならこの合コンに参加するのも悪くない、とオレは思った。

しかし、姫路はどういうコネクションで東を呼べたのか？

そもそも今朝の段階で東の話が出てれば、断ったりしなかったのに。

この時、オレの頭の中には現在澄香とつき合っているという意識は全くなかった。

待ち合わせの時間を十二分程過ぎて、俺は店に入った。

会場となったくランブル・フィッシュ>は無国籍創作料理の店だ。

小綺麗な内装と、リーズナブルな値段設定で若者に人気の店だ。

とはいっても、学生の身には少々高く感じる。

ちゃんと時間制限付の飲み放題コースもあるのだが、店にいるの

は殆どが若いサラリーマンやOLで、学生のグループは俺たちだけのようだった。

多分、東樹里亜が来るというので姫路が奮発したんだろうが。

姫路によると、女子には三千五百円ポッキリと言っているので、足りない分は男子が補うことになるらしい。

後で男共から苦情がでなければいいのだが。

俺は勿論、苦情なんて言わない。

俺はルックスのいいフェミニストというだけじゃなくて、金離れの良い男でもあるからだ。

店員に姫路の名前を告げ、席へと案内される。

俺たちの席は、店の奥の半個室になった一角だった。

「少し遅れたか？ 悪いな」

爽やかな笑顔を浮かべながら、俺はサラリと女子達に視線を流した。

……………なんで澄香がいるんだ？

「どうした、小杉？」

「え？」

姫路の呼びかけに、俺は自分が数瞬固まっていたことに気が付いた。

「さっさと座れよ」

「あ、ああ」

姫路に促されて、ともかく俺は空いた席を見つけて座った。  
それは姫路の隣で。

「とりあえずビールでいいか？」

と訊いてきたので、

「ああ」

と答えた。

その間も、俺の目は澄香から離れない。

澄香の「約束が出来た」というのは、合コンのことだったのか。

しかしなぜ澄香は俺という彼氏がいながら、合コンなんてものに出るんだ？

と考えてハツとなる。

まさか、俺がこの合コンに出るって知ってたのか？

いやいや待て待て。

俺が合コンに参加することになったのは、澄香から断られたからだ。

いや、断じて俺が断られたわけじゃないっ。

そうだ、俺の方が先に断ったのだっ。

俺がグルグルとそんなことを考えてると、姫路が可笑しそうに耳打ちしてきた。

「流石のお前も、東さんに見惚れてんのか？」

東…、東？

ああ、東樹里亜のことか。

正直な話、俺はまだ東を見ていなかった。

いたか？

と思いつつ、まさか「東はどこだ？」とは訊けないので、

「ああ、流石にアレにはちょっと見惚れるな」

なんて答えながら、俺は視線を泳がせて東を搜した。

東はいた。

澄香の隣に。

二人は既にうち解けたのか、親しげに話をしてる。

あれ程の美人に何故気づかなかったのか我ながら不思議だが、なるほど、これなら俺が東を見ているように見えるのも無理はない。いや待てよ。

俺は本当に東を見ていたのかもしれない。

だってそうじゃないか、俺が澄香程度の女をジッと見つめているわけがない。

「じゃあ、取り敢えず全員揃ったので、乾杯といきますかっ」

姫路が朗らかな声で声を掛ける。

すると全員がジョッキを掲げて。

「カンバ~~~~~イ」

あちらこちらから、カチンカチンとジョッキの当たる音がする。

俺がビールで喉を潤していると、姫路がまた耳打ちしてきた。

「言っとくけど、東さんは譲らないから」

「ふうん」

俺は素っ気なく答えた。

姫路という男は、顔こそは普通だが、陽気で話していて楽しいので女子には人気だ。

面倒見が良いので、友人も多い。

だが悲しいかな、「楽しい人ね」で終わりがちだ。

女というモノは、楽しいだけでは満足しない生き物なのだ。

「東狙いなら、席さっさとシャッフルしないと。東の前に座ってんの、安田だぜ？」

安田というのは、メガネを掛けた細身の一見草食風だが、実はバリバリの肉食系だ。

狙った獲物は即食いという、恐ろしく手の早い男だという噂だ。そんな安田が東の前にいる。それに対して俺達は、東達とから一番遠い席にいる。

ところが姫路は、平然と返してきた。

「ああ、大丈夫。安田は普通専だから」

「普通専？」

「ブス専、デブ専とかあるだろ？ あれの普通バージョン。安田はさ、普通の女を狩るのが好きなんだよ」

「つまり？」

答えが分かっているながら、俺は敢えて訊ねた。

「つまり安田の狙いは、今夜の場合、東さんの隣の彼女ってことだよ」

言っとくけどな、姫路。

澄香は「普通の女」じゃない。

俺は内心でだけそう呟いて、ジョッキを飲み干した。

小杉祐輔の眩き その6（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

## 小杉祐輔の眩き その6

確かに宮本澄香は、一見すると「普通」だ。

殊更可愛いということもなく、美人だということもなく、だが不細工というわけでもない。服装はシンプルだが飾り気が無く、特に華やかな東樹里亜の隣に比べると、地味に見える。

だが決してただ者ではないという確信が、俺の中にはある。

あの桧山恵美子をあしらう手際の良さや。

今まさに目の前で、「普通専」とやらの安田のあしらい方を見ていると。

何故その事に、他の連中は気がつかないのかと思うが。

恐らく、皆俺ほど人間を見る目がないからだろう。

いや、正確に言えば、女を見る目がない。

モテない男や数だけこなす男とは、俺は違うのだ。

俺は一度、タバコという口実で席を立ち、戻った時には澄香の斜め前に座った。

いや、正確に言えば、東樹里亜の前の席だ。

それに乗じて姫路が割り込んでくると、なし崩しに席のシャッフルが始まったが、俺たちの周囲の顔ぶれは変わらなかった。

一応席は替わったのだが、澄香が動く又何故か東と安田がくっついていき、東にくっついて姫路が動いたからだ。

勿論俺は、東にくっついてた。

姫路は譲らないと言ったが、東ほどの女をそうみすみす逃す手はないからだ。

ところが、その姫路ときたら、東と話すチャンスを尽く逸していた。

「東さんは、英文学だったよ。向こうの小説、原書で読むの？」

「スミちゃん、生春巻き食べる？」

「うん。ありがとう」

「み、宮本さんは史学科って言うてたよね。史学科ってどんなの？発掘とかすんの？」

「なわけねえじゃん」

「なんで安田が答えるんだよっ」

「宮本さん、この変わりやつこ、美味しいよ」

「ありがとう、安田君。でも、スミちゃんは私のを分けてあげるから」

「東さん、冷や奴持つてないよね？」

「今から持つのよ！」

東はそう言つて、姫路の前の冷や奴を何の断りもなく奪い、澄香の前に置いた。

「あ、東さん？」

姫路が東に声を掛けるも。

「何？」

と、澄香に振りまいていた笑顔など嘘のように、キッと睨み付けられて、スゴスゴと引き下がる。

安田も姫路も、東の意図が分からずに、どう対処していいか戸惑っているようだった。

俺はそんな二人を見て、バカだな、と思う。

東の狙いはあからさまだ。

澄香を使つて甲斐甲斐しさをアピールしつつ、二人が眼中に無い事を示しているのだ。

じゃあ、どうして眼中に無い二人の前で甲斐甲斐しさをアピールするのか？

それは勿論、俺に対してだ。

俺には、女からの秋波が恐ろしいほどよく分かる。

けれど俺は、敢えて東は声を掛けようとはしなかった。

「小杉君、メアド教えて」

東を無視する様に、隣の席の、癒し系の可愛い子の相手をしていた。

フワツと巻いた茶髪に、長い睫をやたらとパチパチさせてる子だった。

照れて肩を竦める度に、ちよつと大きい襟元からは、僅かに胸の谷間が見える。

天然系を装ってはいるが、確実に計算された仕草だろう。

百戦錬磨の俺には、その程度の「演技」が分からないはずもないけれど、俺はこういうあざとさは嫌いじゃない。

女って、よく男の前で態度が変わる女の事を嫌うけど。

異性の前と同性の前で、態度が変わるのは当然だ。

何せ、目的が違うのだ。

「いいよ」

俺は気軽に答えながら、チラリと東の方を見た。

すると何故か、澄香と目が合ってしまった。

東の隣に澄香はいるのだから、別に奇妙な事でも何でもなかったのだが。

澄香は俺と目があつて、そして瞠目した。

「あれ、小杉祐輔。いたんだ」

ゴトンッ。

俺は何故か携帯を落としていた。

コンパが始まってから、優に一時間は経っている。

なのに宮本澄香は、俺の存在に気づいていなかった。

そんなバカなことがあるか！

遅れてきた人間が注目を浴びるのは、世の常だろう！

そもそもこの俺が澄香に気がついて、澄香が俺に気がつかないなんてことがあっていいわけがないっ。

第一、もう既に七分二三秒は、澄香の斜め前にいるんだぞ？

となれば理由の一つ。

澄香は俺に気づいていながら、今の今まで気がつかなかったフリをしているのだ。

それは何故か？

それは勿論、俺が澄香に気づいていながら、声を掛けなかった事を拗ねているのだ。

しかも七分二三秒（既に七分四八秒にはなるが）も側にいて、俺はずっと隣のこれ見よがしにあざとい女に構ってばかりいるのだから、それも致し方がない事だ。

何せ、俺たちはつきあい始めて三日目なのだ。

その間、一度も会うどころか電話で話しすらしていなかったとしても。

いや寧ろ、だからこそ余計に拗ねるのだろう。

ふっ。

百戦錬磨の俺には、澄香の気持ちに手が取る様に分かる。

仕方がない。

優しい言葉でも掛けてやろう。

と思っただ。

困った事に、澄香の事を何と呼んで良いのか迷ってしまった。

俺はずっと、澄香の事を心の中では「澄香」と呼んではいたが、実際には澄香に澄香と呼びかけた事はない。というか、澄香に呼びかけたことすらない事に気がついた。

宮本さん？

いやいや仮にも恋人なのだ。それじゃあ余りにも他人行儀すぎる

だろう。

しかし、いきなり「澄香」と呼ぶのも躊躇われる。

俺は過去を振り返り、今まで彼女の事を何と呼んでいたのか思い出す。

まさみ、ゆうか、りかこ、あゆみ、えりか、ようこ、さゆみ、かおり、あいり、めい、ちさ、れな、エリザベス。

漏れなく全員名前だ。

しかし何時から名前と呼ぶようになったのか？

困った事にその点に関しては、全く記憶になかった。

「……………」

「……………」

俺は澄香に掛ける言葉が見つからず、澄香は澄香で俺の言葉を、期待に満ちていなくもないと言えなくもない、例のよく分からない眼差しで、ひたすら待っている。

待たれていると思うと気持ちが酷く急いで、心臓の鼓動が早くなつた。

ここは、言うしかない。

澄香、と。

言え、俺！

言っただ！ 俺！

「すっ」

俺の意を決した一言を、しかし東が遮った。

「スミちゃん、コイツ知り合い？」

「知り合いっていうか…」

「じゃあ、他人？」

「まあ、他人は他人だけど」

確かに、俺と澄香は他人だ。

まかり間違っても、血縁ではない。

澄香は間違っではない。

ただ、東の質問の仕方が悪いのだ。

普通、「他人か？」なんて質問をするだろうか。

何やらコイツには、桧山恵美子と同じ匂いがするのは気のせいかな？  
恐らく、澄香も東に質問に違和感を感じたのだろう。

目を見開いて、俺に何某かのアイサインを送ってきた。

どういふアイサインかは不明だが、澄香の視線の意味が分からないのはいつもの事だ。

勿論、澄香、俺には全部分かっている。

澄香の言葉に他意はないと。

「うわあ！ どうした！？ 小杉！」

姫路の突然の怒鳴り声に、俺は驚いた。

「どうかしたか？ 姫路」

「どうかしたのはお前だろう！」

「何が？」

「何がって…。小杉、お前、なんで泣いてるわけ？」

ははは。おかしい事を言うな、姫路。俺が泣く分けないだろう。  
理由もないのに。

どうやら大分酔っているみたいだな。

そうだろう、澄香？

しかし俺も強か酔ったらしい。

やたらと視界が滲んで見える。

「ええと…」

澄香は戸惑う様に目を泳がせた後、俺を指差して言った。

「ジュンジュン、コレ、彼氏」

ジュンジュンとは東樹里亜のことらしい。

「うお！ 凄いな！ 小杉！ 一瞬で涙が引込んだぞ！ というか、文字通り引込んだな！！ そんな特技があったとは！ もう一回やってみてくれ！」

姫路が何やら訳の分からない事をわめいていたが、突然クリアになった視界に満足して、俺はジョッキを掲げた。

「澄香。君の瞳に乾杯」

澄香は感激の余りか、赤い顔をしてその場に突っ伏した。  
「ふ、腹筋痛いつ」  
照れすぎて腹筋が痛いとは、何とも奇妙な女である。

## 小杉祐輔の眩き その6（後書き）

この涙のせいか、小杉君はお客様から「こすぎん」という愛称を頂きました。「ピクミン」みたいな感じで、お似合いですね（笑）。

## 隙間SS ジャイアニズム（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

隙間SSとは、流れるに本編に入れられなかったエピソードなどです。

ある意味ヤオイ（ヤマなしイミなしオチなし）ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

27話のどこかに入るかもしれないエピソード。

## 隙間SS ジャイアニズム

「時の流れというものは、残酷ね。古の英雄の名も、形無しだわ」

「そんな妙な名前の英雄がいるか！」

そりゃそうだ、「天然ボケ」なんて名前の英雄がいたらビックリだ。

けれど、ジャイアンはある意味日本の子供のヒーローなのだ。

「あら、彼の残した言葉は偉大よ」

アタシは何かを懐かしんでもいるかのように、遠くを見つめて言った。

遠くだったって、精々三メートル先の極彩色の壁だけだ。

「オレのモノはオレのもの、お前のモノはオレのもの」

日本の子供なら、一度は言ってみたい台詞だろう。

因みに恵美は、二人の義兄に対して日常的に言っている。

けれど恵美が羨ましいかと訊かれれば、そこは微妙だ。

なんてことを思いつつ、アタシは連中に向き直った。

「これぞ至言ではなくて？」

勿論、満面の笑みを添えてである。

笑顔だったって、単に顔面が歪んでいるだけの話なんだけど。

「ただの暴言じゃねえかつ」

フェロモン男のツツコミはやっぱり早い。かつ的確だ。

一般人にしておくのは非常に惜しいと思う。

「そんな上官がいては、命が幾つあっても足りんだろう」

苦虫を噛み潰した様に言うのは金髪直情。

なんでそこで上官が出てくるのか、ヤツの思考はイマイチ謎だ。

「……………一人、言いそうな人間がいないこともないですが…」

と、不吉なことを言うのは黒髪腹黒。

一体誰だよソレ！

と心の中でツツコム側から。

「む。確かに至言だな」

と低い呟き声。

貴様か~~~~~！

と叫びたいのをアタシは堪えた。

金髪直情とフェロモン男は一步下がり、黒髪腹黒は何かを諦めた様な溜息をついた。

明らかに仲間から退かれている鉄面皮だが、それに怯む様子もなく。

「そのジャイアンという人物について、もっと詳しく……」

更に食いついてきやがった！

鉄面皮は何処までも無表情なのに、眼差しだけやたらとキラキラと輝いていた。

金の瞳がキラキラなので、目が潰れるかと思う程眩しかった。

これにはアタシも流石に退いた。

あんまり退きすぎて、あろう事が敵に助けを求めてしまった。

思わず黒髪腹黒と視線を合わせて、

「アレどうにかしろよっ」

と目で訴えた。

この場でアレをどうにかできるのは、黒髪腹黒しかいないと思ったからだ。

黒髪腹黒は一瞬目を見開いて、けれど直ぐさまニンマリと物凄く人の悪そうな笑みを浮かべた。

その瞬間、アタシが後悔したことは言うまでもない。

## 隙間SS　ちやぶ台返し（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

隙間SSとは、流れるに本編に入れられなかったエピソードなどです。

ある意味ヤオイ（ヤマなしイミなしオチなし）ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

25話のどこかに入るかもしれないエピソード。

## 隙間SS　ちやぶ台返し

「我々はクリス殿を保護したのであって、誘拐したわけではありません。いい加減、我々を犯罪者呼ばわりするのは止めていただきたいのですが」

黒髪腹黒の黒い気に呼応する様に、他の連中もまた攻勢を掛けてくる。

「あれは止む終えぬ処置であって、犯罪者呼ばわりされる様なことは何もないっ」

「大体、アレを誘拐して何になるってんだ？　俺たちは身代金でも要求したか？」

「誘拐が必ずしも営利目的とは限らないことくらい、ご存じでしょう？」

「……………他にどんな目的がある？」

「人の子の中には、特殊な趣向の者が存在すると聞き及んでおります」

「……………」

「私には全く理解の範疇を越えていますが、幼年趣味や死体愛好などがあるとか」

「……………布製力エル相手に何をしろと？」

「さあ。私の口からはとてもとても…」

ブチッ。

何かがキレる音がした。

「ぎゃあ！！　止める！　何を想像させんだ！！」

一体何を想像したのだろう？

アタシの方が聞きたいくらいだ。

「人の趣味にとにかくいうつもりはありませんが、合意のない関係は、犯罪ですわよ？」

「んなわけあるか〜〜！！！！」

フェロモン男の声が、地下水路に木霊した。  
ちやぶ台があったら、ひっくり返していること間違いなしだ。

小杉祐輔の眩き その7（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

## 小杉祐輔の眩き その7

宮本澄香とつきあい始めて一週間。

最初の三日間と違って、俺達は頻繁にメールをしあっている。

——今日昼飯一緒に食べねえ？

——今日講義午後からだから、昼ご飯は家で食うから。

——今日友達と飲みに行くけど、澄香も来るか？

——明日朝一の講義だから、止めておく。

——今日は何時なら時間空いてる？

——今日は一分たりとも空いてない。

澄香は一体何に照れているのか、中々色よい返事をしない。

きつと、合コンで俺の事を「恋人宣言」したことを照れているんだろう。

今思えば、澄香が合コンに参加したのも、きつと俺が参加すると知っての事だろう。

その理由はただ一つ。

嫉妬だ。

きつと俺の誘いを断ったのも、俺を試すためだったんだろう。

澄香は、もつと俺に食い下がって欲しかったに違いない。

ふむ。

俺を百戦錬磨と知って、駆け引きを仕掛けてきたか。

俺に言わせればお子ちゃま過ぎて、作戦だったことすら気がつかなかった。

恋愛初心者の澄香なりの精一杯の駆け引きだったんだろう。

ところが俺が乗らなかったものだから、ああして合コンに乗り込んできて「恋人宣言」までしてしまったと。

あんなに大胆な行動に出るかと思えば、こうして初心な所もある。澄香は俺の相手としては役者不足だが、俺に恋する余り右往左往するなんて可愛い所もあるじゃないか。

タイプは様々ながらも遊び慣れた女とばかりつき合ってきた俺には、澄香の行動は新鮮だった。

だから俺は仕方なく、澄香の講義スケジュールを事細かに調べ上げ、澄香が承諾しやすい誘い方をするように心がける事にした。その効果は直ぐに出た。

——今日、四限目休講なんだろ？ お茶しねえ？

——何で知ってんの？ まあ、構わないけど。

こうして俺は澄香との約束をゲットした。

どうだ！ この俺の優秀さ！

狙った獲物は逃さない、ハンター小杉祐輔とは俺の事だ！

俺は気分が良くなって、待ち合わせ場所のカフェに向かった。ところが途中、会いたくもないヤツに会ってしまった。

「小杉じゃないか。何か、スゲえにやけてるけど、何か良い事あったのか？」

自称「普通キラー」安田だ。

しかし澄香を平凡な普通の女と思い込むあたり、まだまだな男だ。「何か用か？」

「別に。ただ、小杉がスキップなんかしてるから、余程の事があったんだと思うだろ、普通」

「何言ってるんだ？俺がスキップなんかするわけないだろう。子供じゃあるまいし」

「…………無意識？」

「お前、メガネ変えた方がいいんじゃないかね？」

「…………で、何処行くんだ？」

「お前に関係ないだろう」

「待ち合わせか？」

しつこい男だ。

俺は些か鬱陶しくなってきた。

そもそも俺にはこの男と馴れ合うつもりは欠片もない。

「澄香が休講になったっていうからな」

俺はそれだけ言うと、その場を後にした。

俺は基本的に、待ち合わせ時間には少し遅れて行く方だ。

しかし、相手は恋慣れない澄香だ。

下手に待たせて不安がらせるのは、特に今の澄香にはキツいだろ  
う。

俺は瞬時に安田の事など頭の中から消し去った。

だから安田が実は澄香と同じ史学科で。

「今日の休講は四限の長野教授の講義だけじゃなかったっけ？  
…

…… 今まだ昼前だぞ？」

なんて呟いていた事など全く知らなかった。

## 隙間SS オランダの秘密（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

隙間SSとは、流れるに本編に入れられなかったエピソードなどです。

ある意味ヤオイ（ヤマなしイミなしオチなし）ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

挿話「耳に残るはカエルの歌声」の後のエピソード。

## 隙間SS オーランドの秘密

「幾ら何でも、分厚すぎはしまいか？」

第一近衛隊隊長オーランドが、本を拾い上げながら言う。

彼の氣遣わしげな視線は、昏倒する国王侍医に向けられている。

しかし王佐は、ニツコリと晴れやかに笑って言った。

「それでも薄くなった方なんですよ？」

そんな彼の姿を、百人いれば百人共が思うだろう。

黒い、と。

「そ、そうか……」

イスマイル王国きつての精鋭部隊を率いる隊長は、そんな王佐を真つ正面から見る事ができなかった。

ただこの場に国王侍医の熱狂的支持者である彼の助手がいなくて助かったと思い、清廉な騎士はそう思った自分を僅かに恥じた。

「は、こうなったら仕方ねえ。代わりに俺が治療するから、お前から並べ」

第一近衛隊副隊長ディンゼアが、癖のある明るい茶色の髪を掻き上げて言った。

如何に怠惰な雰囲気と纏わせていようと、彼は軍人である。ちょっとした怪我の治療程度ならお手の物だ。

そもそも単なる擦り傷なので、本来ならば医者の手など必要ないくらいなのだ。

ディンゼアの言葉に同意する代わりに、倒れた椅子を起こして宰相が座る。

当然の如く国王侍医は床に放置されたままだったが、今その場に彼を顧みる者はいなかった。

「ナジヤは私が診よう」

四人なのだから、二人づつで交互に治療すれば効率がいいと思つての、オーランドの提案であつたが、

「丁重にお断りさせていただきます」

王佐が、これまた爽やかに笑って言った。

騎士の中の騎士と称されるオーランドは、その巧みな剣技からは想像も付かない程日常生活において不器用だった。

彼の部下の中には、怪我の治療と称する傷害事件に遭遇した者は少なくなかった。

何故治療行為が傷害事件になるのか、被害を受けた人間にすら全く分からないため、彼の「治療行為」はイスマイルの七不思議として密やかに噂されていた。

「そうか…」

寂しそうに目を伏せるオーランドだったが、怪我をすると分かっている彼を慰めるなどという奇特な心の持ち主は、その場にはいなかった。

## ケロレンジャーへの50の質問（1～4）（前書き）

Web拍手のお礼だったものです。

『オリキヤラに50の質問（<http://waterfuture.finito.fc2.com/orichara50.html>）』からお借りしてきました。

## ケロレンジャーへの50の質問(1~4)

01 お名前をどうぞ!!

リユー「アンドリユー・サルダス・ケロタウロスだつ。リズはリユーって呼ぶな!」

クリス「クリストファル・ウディノ・ケロタウロスだよ。以後お見知りおきを、美しい人」

デイー「相手が女性とは限ないわよ?」

クリス「僕が女性以外に名乗る訳がないだろう」

デイー「あらヤダ、それもそうね。アタシはエウリディケ・シルファド・ケロタウロス。デイーって呼んでもいいわよ?」

ミリー「私は、ミリュリアナ・アシエス・ケロタウロスの名を戴いておりますわ」

サウザ「……………」

デイー「ちよつと、早く名乗んなさいよっつ」

サウザ「サウザード・ネルス・ケロタウロス」

ミリー「断っておくまでもないですが、あくまでも今生での呼び名ですので」

リユー「ま、ぶつちゃければ、全員『宮本澄香』だもんな! あははははははは!」

バキ!!

デイー「バカね! ソレを言っちゃったら、終わりでしょ!」

リユー「前にも言ったが、痛くはないんだぞ?」

デイー「誠意で痛みを感じなさい!」

クリス「デイー、それは無茶というものだよ」

デイー「あらん、道理を引つ込ませれば無理は通るものよ」

ミリー「ならば徹底的に『無理』を押さえつければ道理が通るわ」  
クリス「それは、『道理』とは言わないんじゃない? ヒツ」

ミリーの物凄く「いい笑顔」に、全員一歩下がる。

ミリー「次の質問にいきましょうか??」  
ミリー以外「「「「は、はいい」」」」

02 性別は?

クリス「オスだね」

リユー「俺は漢だ!」

デイー「じゃあ、アタシは雌ね」

ミリー「女性です」

サウザ「…………… 我は子供は産めん」

ミリー&デイー「「そ、そうね」」

クリス「サウザ、まさか君、産みたいなんて言うんじゃないだろうね」

サウザ「…………… 産んでみたいとは思う」

クリス「ええ!?!」

デイー「そうね。志が高いのはいいと思うわ」

クリス「そういう問題じゃないだろう」

デイー「じゃあどういう問題?」

クリス「僕がサウザを愛さなくちゃならないという問題さっ」

デイー「はあ!?!」

クリス「だって子供を産みたいなんて。それって、女性ってことじゃないかっ」

ミリー「…………… トランスジェンダーって事かしら?」

リユー「とらんすじえんだーって何だ? それは美味しいのか?」

デイー「んもう、黙っててよ、リユーはっ」

ミリー「特に美味しいものではないわ」

リユー「そうか。ならいい」

クリス「で、どうなんだい? サウザ?」ゴクリッ。

サウザ「…………… お前の子供を産む気にはならん」

クリス「ええ!?!」シヨック!!

ミリー「あら、クリス、振られたわね」

ディー「やゝい、ふられんぼ」

クリス「酷いよ！！ サウザ！ 僕に一体何の不満があるのさっ  
！」

リユー「ふむ。では俺の子供を産むか？」

クリス「ちよつと！ リユー！ 割り込まないでよ！」

ディー「あらやだ。男ばかりで三角関係？？」

リユー「さんかくかんけいとは、美味しいのか？」

クリス「美味しくないよ！！」

リユー「そうか。ならばいらん」

ディー「で、どうなの？？ サウザ？」

サウザ「……………」

クリス「僕がダメでリユーが大丈夫なんてわけないよね！？」

ミリー「というよりも、サウザ、何故子供を産んでみたいの？」

サウザ「異物が腹の中に宿るといふのはどういふものかと」

サウザ以外「……………」

ミリー「経験してみたいのね？」

サウザ「コクリ。」

ディー「なゝんだ。ただの好奇心なわけね」

リユー「なんだと思っただ？」

ディー「好きなオトコでもできたのかと」

クリス「おっと、僕に惚れるのはよしてくれよ。僕は女性しか愛  
せないからねっ」

リユー「なら俺と作るか？」

ディー「バツカじゃないの？ どっちにしても、男同士じゃ子供

できないわよ」

リユー「何時からそうなった？」

ミリー「随分前からそうですよ」

リユー「そうか。では子供というのはどうやってできるのだ？？」

リユー以外「……………」

クリス「ええと、リユー、本気で言ってるの？」

リユー「勿論そうだが？」

デュー「ちよつとクリス。アンタが教えてあげなさいよつ。得意でしょつ」

クリス「ええ〜。それはちよつと、なんていうか、勘弁してクダサイ」

リユー「何だ？ そんなに難解なのか？」

ミリー「知らなくても生きていけるわ。貴方なら」

サウザ&クリス&デュー、ミリーの言葉に深く頷く。

リユー「そうか。ならいいか」

リユー以外（（（いいんだっ！）））

### 03 誕生日！

クリス「……………つて何時の事をいうワケ？」

ミリー「私達が初めて動いた日かしら？」

デュー「完成した日じゃない？」

リユー「誕生日なんか知ってどうするんだ？」

デュー「きつと、プレゼントをくれるのよ」

リユー「美味いモノか？」

デュー「そういうこともあるんじゃない？」

リユー「じゃあ、言っておくか」

クリス「で、何時なんだい？」

リユー「それは知らん！ だが適当に言ったところで、嘘とは分かるまい！」

デュー「あら！ それもそうねン！ じゃあアタシ、エンナルの月十二日にするわ」

リユー「俺様はガンダルの月四日にするぞ！」

クリス「それじゃあ僕はルドラの月二三日にしようかな」

サウザ「……………ハデイルの月三八日」

ミリー「それを地球の西暦に直すとどうなるの？」

リユー「知らん！」

クリス「それは分かんないねえ」

デイー「それも適当に言っとけばいいんじゃないの？」

サウザ「……………九月四日にする」

リユー「お、サウザ、珍しく積極的だな！」

クリス「なんで九月四日？」

サウザ「九るしんで四ぬ」

サウザ以外「……………」

デイー「苦しんで死にたいの？　ならアタシが協力してあげるけど？」

クリス「ちょ、ちよつとデイー！」

サウザ「我は死なん」

クリス「そ、そうだよねっ。僕ら死なない存在だもんね！」

デイー「死にそうなくらい苦しませることはできるんじゃない？」

クリス「そ、それは……！」

ミリー「それも無理よ。私達、痛みを全く感じないのよ？」

デイー「あ、そうか。ざ〜んね〜ん」

#### 04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

リユー「身長は約一メートル。顔立ちは…、カエルだな」

クリス「だねえ」

デイー「色とか言えばいいんじゃない？」

リユー「俺は冒険の赤だ！」

デイー「なんで赤が冒険なのよ」

リユー「なんとなく！」

クリス「じゃあ僕は愛の炎の青で」

デイー「炎つてのは赤じゃないの？」

クリス「温度が高いと火は青くなるのさ」

デュー「身を焦がす様な愛というわけね」

リユー「何度ぐらいなんだ？」

ミリー「千五百度ぐらいじゃないかしら？」

リユー「それじゃあ燃えすぎだろう。骨も残らん。肉はもっと残らん」

クリス「肉つて…。食べるわけでもあるまいし」

リユー「食わんのか？」

リユー以外（（ああ、食べる気なんだ…）（）（）

デュー「あら、単に硫黄を燃やしてるだけかもよ。それなら三五十度くらいだから、良い具合に焼けるんじゃない？」

リユー「それなら構わん」

クリス「硫黄は臭いんじゃないかい？」

リユー「クサヤもドリアンも臭いだろう」

クリス「ああうん。食べる気満々なんだね」

ミリー「……………普通に焼けばよいのじゃなくって？」

リユー「おお、それもそうだなっ」

クリス「えと、僕の話じゃなかったっけ？（いつの間に焼き肉

の話に…）」

デュー「じゃあ、次アタシね！」

クリス「無視？？」

デュー「んゝとねえ。白と言えばアレよねゝ」

クリス「やっぱり無視なんだ…」

デュー「純潔の白！」

クリス「それは幾らなんでも図々しいよ」

リユー「白という色が気を悪くするぞ。なあ？」

サウザ「壊れた人形のようにコクコクと何度も無言で頷く。

クリス「デュー。幾ら何でも図々し過ぎるよ」

ゴツツツツツツツ！！

リユー&ミリー&サウザ（（物凄い音した！！ 布製品なのに  
！）（）

クリス「でも、痛くな〜い」

ガスッ！ ドガッ！ ドゴッ！ ガキッ！ バキッ！（エ  
ンドレス）

呆氣にとられながらも、目を逸らす事ができないリユーとサウザ。  
ミリー「じゃあ次は私の色ですね」まるで何事もないかの如く冷  
静に。

リユー＆サウザ（無視か！）

ミリー「私はケロレンジャーの良心、癒しのミリュリアナ。無難  
な様ですが、癒しの緑といったところでしょ」

サウザ「無難？」

リユー「ぶなん？ ……なるほど。『無難』俺の知らない隠さ  
れた意味があるのだな？」

ミリー「ありませんよ」ニコニコニコニコニコニコニコニコ

リユー、咄嗟に目を逸らしながら

リユー「そ、そうか。なかったか」

ミリー「残るはサウザだけよ？」

サウザ「……………絶望の黒だ」

リユー「絶望だと？ サウザ！ 悩み事でもあるのか！？」

サウザ「……………今の気分」

リユー「そ、そうか。そうだな。うん。ならば俺は絶望の赤と言  
ったところか」

ミリー「本当の絶望を教えてさしあげましょうか？」

リユー＆サウザ、ダダダダダ——！！ と脱兎の如く

逃げ出す！

クリス「ああ、僕も連れて行って！」

リユー＆サウザ、ダダダダダ——！！ と戻ってきて

クリスの両脇から支えると、またダダダダダ——！！

と去って行った。

ディー「あら、逃げちゃうなんて、おっとこらしくない」

ミリー「男というものは本来『女々しい』ものなのよ」

「ディー」あらん、それもそうねん」

## ケロレンジャーへの50の質問(1~4) (後書き)

色分けできないので、ちょっと読みづらいですね。  
今度はムダメンでやってみるとか、どうでしょう？

小杉祐輔の眩き その8（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

## 小杉祐輔の眩き その8

その週の土曜日、俺は澄香と映画を見に行く事になった。  
所謂デートというヤツだ。

先日、そう、澄香が休講で会った時、カフェでそういう話になったのだ。

——映画？　なんで？

——え？　見たくないのか？

——見たいつて、何の映画？

——それはまだ決めてない。

——は？　えっと、何か観たいヤツあるワケ？

——特にない。

——じゃあ何で映画？

——遊園地でもいいけど？

——遊園地い？

——じゃあ、水族館か？

——うーんと、ともかく週末出かけたいワケね。

——別に俺は出かけたくなはないが、澄香が出かけたいだろう？

俺と。

——ええと、うーん。　ああ、そうか、デートか。　そうだね、デ

ートは必要だよな。

——じゃあ、水族館に行くか？

——ああ、うーん、じゃあ映画で。

デートというモノは、女の方から強請るものだと思っていた俺は、  
しかし奥手な澄香に関しては俺の方から動いてやるしかない。

そう思って話を向けてみれば、案の定澄香は嬉々として承諾した。  
どうやら澄香は、「必要」だと言っ程、俺とデートしたかったらしい。

照れ隠しにアレコレこねて、結局俺の案を採るトコロなんか、初

心すぎて笑えた。

口元が緩むのを我慢するのが大変だった。

澄香は待ち合わせの時間五分前に来た。

澄香の化粧つ気のない顔は、どこかまだ眠そうだった。

きつと俺とのデートにドキドキしすぎて、夕べはよく眠れなかったに違いない。

眠ったのは明け方で、目覚まし時計を無意識のうちに止めていて、起きてみると時間が迫っていて驚いたってトコロだろう。

一昔前の少女漫画みたいな女だな。

それでも遅れなかった事は、褒めてやろう。

男に気を持たせようと態と遅れてくる女がいるが、俺はそういう手管は嫌いだ。

というのも、俺は待つのが嫌いだからだ。

待つくらいなら、さっさと他の女でもナンパしてどこかへ行くさ。俺？

俺は勿論熟睡したさ。

何百回となくデートをこなしてきた俺が、そんな中学生みたいなマネをするわけがないだろう。

ただ夕べは、いつの間にか欠席していたらしい英語の課題を出されて、それを仕上げるのに深夜まで掛かってしまったが。

一体いつの間に、欠席してしまったのか。

英語は必須科目だから、休まないように注意していたのに、全く身に覚えがない。

英語の講義があつたのは、三限目だ。

澄香とカフエで待ち合わせしたのは四限目の時間帯だから、欠席するはずもないんだがな。

何故かあの日の記憶は曖昧なのだ。

ひょっとして、疲れているんだろうか??

しかし疲れる様な事をした覚えもないんだが。

まあいい。

今は澄香とのデートに集中しよう。

待つのは嫌いだが、俺は必ずデートの相手に集中する事にしている。

それがモテる男の秘訣なのだ。

「澄香、今日は一段と寝癖がチャームिंगだな。カエルプリントのTシャツと良く合ってるぜ」

相手のファッションを褒める事も重要だ。

それが例え、慌ててそこら辺のモノを着てきた様にしか見えなくても、きつと何時間も掛けて選んだのに違いないからだ。

そしてさりげなく独占欲を見せたりなんかすると、もうそれだけで女は舞い上がってしまう。

「けれどデニムのクラッシュ具合はもう少し控えめな方がいいかな。そんなに足が見えていると、他の男達にまで澄香の綺麗な足が見えてしまう」

俺の言葉を聞いて、突然澄香がしゃがみ込んだ。

「ど、どうした? 澄香??」

俺も慌てて澄香の隣にしゃがみ込む。

子供でもあるまいし、街頭で二人して座り込むなんてバカみたいだが、俺が座らなければ澄香一人が恥ずかしい事になってしまう。

フェミニストたる俺には、そんな状況は捨て置けない。

ひよつとしたら、体調が悪いのかも知れないのだ。

「澄香？」

名前を呼びながら澄香の顔を覗き込む。

すると澄香は、顔を真っ赤にさせて震えていた。

「お、お腹痛いつ。か、勘弁してっ」

またか。

俺は肩の力を抜いた。

それが呆れのためなのか安堵のためなのかは、自分でも分からなかったが。

澄香は照れると腹が痛くなるというのは、既に実証済みだった。

なんでそうなるのかは不明だが。

人体の不思議というヤツだろう。

しかしあの程度の言葉でここまで照れるとは。澄香は何て初心なんだ。

何時までも蹲っている澄香を見ると、俺の中でほんのちよつとだけ、澄香を大切にしまってやってもいいという気持ちがあわき上がってくるのだった。

小杉祐輔の眩き その9（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

## 小杉祐輔の眩き その9

澄香と観た映画は、韓国映画だった。

俺は韓流というと、純愛ものや歴史ものを思い浮かべるんだが、その映画はそのどれでもなかった。

ズバリ。

猟奇殺人モノだった。

元刑事の男が経営するデリヘル店。

その女達が次々と行方をくらませる。

男は女達が逃げたと思っていたが、ある日女達が最後に取った客が同じだという事に気づく。

恐らくそいつが女達を手引きして逃がしているのだらうと、客の家を訪ねるが…。

実は女達は逃げていたんじゃないくて、その客に拷問され殺されていたわけだが。

そのシーンが、生々しい。

実際に起きた連続殺人事件が元になっているらしいが、この犯人は相当にイカれてる。

恋人と映画と言えば、恋愛映画かせいぜい軽めの娯楽映画と思っていた俺は、新鮮過ぎて目からウロコどころか、眼球そのものがこぼれ落ちそうだった。

言っておくが、決してこれは涙ではない。

「苦手なら、先に言えればいいのに」

「別に苦手じゃないぞ」

「目も鼻も赤いけど？」

「そうか？ 多分、急性アレルギーだろう」

「ハンカチ使う？」

「使って欲しいんなら、使う」

「あゝ、うゝん。じゃあ、使って欲しいから使ってよ」

「そこまで言うのなら仕方がない。ちょっとトイレに行ってくるから、その柱の所で大人しく待ってるよ。ウロウロすんな、はぐれるから」

俺はトイレに行つて、鼻をかみ顔を洗った。

鏡で自分の顔を見てみると、確かに澄香の言つとおり、目と鼻が赤い。

これは典型的なアレルギー症状だ。

姉貴が酷い花粉症なので、よく分かる。

花粉症はある日突然なるという。

実際姉貴の花粉症は、一昨年突然始まった。

花粉症もアレルギーの一種だ。つまりアレルギーはある日突然起きるのだらう。

しかし、まさかこの俺にそれが起こるとは。

今は花粉の季節ではないから、アレルギーは別のものだらう。

もしかしたらハウスダストとかそういうヤツじゃないだらうか。

この映画館は一見清潔そうだが、実は目に見えないレベルで物凄く不潔なのに違いない。

お陰で俺の男前っぷりが二割減になってしまった。

こんな俺を見て、澄香はどう思うだらうか？

澄香は間違いなく俺のイケメンぶりに惚れてるハズだ。

何せ、付き合うまで殆どともに話した事がなかったのだ。

合コンで会つても、大学ですれ違つても、学食で隣の席に座つても。

俺は澄香に話しかけなかったし、澄香も俺に話しかけてはこなかった。

そんな澄香が、どうやって俺の性格を知る事ができる？

勿論、端から見ていても俺のフェミニストっぷりは明らかだろうが。

おおっと、いかん。

澄香をこれ以上待たせるのも心配だ。

澄香は特別可愛い訳でも美人な訳でもなく、男好きするタイプでもない。

どちらかと言えば一見したところ取っつきにくいので、そうそうナンパされる事も無いだろう。

しかし人を見る目がある男なら、澄香がただ者ではない事など、ちよつとしたきっかけで見破ってしまっだろう。

逆に言えば、そういう男は手強いって事だ。

俺は手櫛でと髪を整え、ザッと全身をチェックする。

よし。完璧だ。

俺は今日もイケている。

これで颯爽と戻れば、さっきのアレルギー全開の醜態は澄香の頭から吹き飛ぶ事だろう。

澄香が俺に惚れ直す画が目に見え。

なんて考えながら戻ってみると。

澄香が。

なにやらチャライ、というか胡散臭い男と、楽しげに談笑していた。

それは。

俺が、見た事のない笑顔だった。

俺は何故だか呆然と、その場に立ち尽くしてしまった。

小杉祐輔の眩き その9（後書き）

映画は『チエイサー』でした。

## 隙間SS ルルンランプ（前書き）

Web拍手のお礼SSだったものです。

隙間SSとは、流れるに本編に入れられなかったエピソードなどです。

ある意味ヤオイ（ヤマなしイミなしオチなし）ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

挿話「耳に残るはカエルの歌声」の前の話。

何故彼らはあんなにもシャルルートに腹を立てたのか？

## 隙間SS ルルンランプ

彼らは見た。

自分たちの顔に黒々と塗られたインクを。

彼らは知った。

自分たちの顔面が甚だしくヒリつく訳を。

しかも厄介なことに、彼らの顔に塗りたくられたインクは、布製カエルからの何らかのメッセージであり、そのため直ぐにでも拭い去りたい衝動を抑えなければならなかったのだ。

「次会ったら絶対殺すっ！」

そう高らかに物騒な宣言をした第一近衛隊副隊長ディンゼアを咎める者は、その場にはいなかった。

「それにしても一体、どれくらい気を失っていたんでしょうか？」

気怠さが抜けないのか溜息まじりの王佐の問いに、誰もが自分たちを照らしているランプを見遣った。

彼らが地下通路に持ち込んだランプは、シュゼントガスという可燃性のガスを燃料とするものだ。

シュゼントガスは天然ガスの一種だが、その産出場所は特殊で手に入りにくい。

しかし七年程前に画期的な方法で製造する事に成功した。

特殊な製法で作られた「ルルンダイト」という炭素化合物と、これまた特殊な水溶液「ルルン液」とを反応させる事で発生させるのだ。

ランプの燃料室にそのルルンダイトを入れ、上の水室からバルブを緩めてルルン液を落とす。

そうして発生したガスに火を付けるのだ。

ルルンダイトとルルン溶液自体に可燃性はなく、従って別々に持ち運べば安全でもある。

その画期的なランプは、瞬く間に大陸中に普及した。

販売元が神殿だと言う事も、普及率を促進させた。

そして、今や人々の生活には無くてはならないものとなった。

そのランプの名は、ルルルンダイトとルルルン液を使用するので「ルルルンランプ」と名付けられた。

燃料にしても製品にしても結構な巫山戯具合の名前だが、発明者の命名であるため、それがれっきとした登録商標である。

その発明者の名は、シャルルート・ネルゼス・アウラ・ネネーシ・デイ・ハジエク・ネラスラス。

賢者として名高い彼は、発明品に自分の愛称をもじった名を付ける傾向があり、同様に「ルルルン五階から点眼器」「ルルルン砂山製造即崩壊機」「ルルルン耳かき補助器」などがある。殆どの発明品は用途のよく分からない代物だが、ルルルンランプは珍しく優れた実用品であった。

しかしその実用性と普及率にも関わらず、人々はその正式名称を口にしたがらない。その傾向は、何故か発明者の人となりを知る者程強かった。

「シュゼントランプの燃料はどれくらい保つんだっただか？」

第一近衛隊隊長オーランドの問いに、ディンゼアは肩を竦めて答えた。

「固形燃料と水溶液一式で三時間ジナスだな」

「残り時間は？」

宰相クラリスが、重ねて問いかける。

ディンゼアが水室の目盛りを確かめながら答えた。

「あと半ジナスってとこだな」

「確か地下水道に降りる前に見た時は、まだ一ジナス半は残ってたはずだぜ」

「つまり一ジナス近く倒れてたってことか？」

「無駄にシュゼントを消費したな……」

ルルルンダイトもルルルン液も高価な物ではないが、その費用は国庫から出ている限り無駄に使うのは憚られた。

そんな彼らの会話に、ずっと沈黙を守っていた王佐がポツリと言った。

「『ルルルランプ』、可愛い名前だと思うんですけどねえ」シャルルトの人となりを知って尚そう言える王佐に、他の三人から奇異の視線が向けられる。

「そんな目で見なくても…。何もシャルルトが可愛いと言っている訳じゃないんですから」

「当たり前だつ。アレを可愛いなどとはざいたなら、私は貴殿を斬るしかつ」

やたらと思ひ詰めた表情でそう言うオーランドだが、黒々と落書きされた顔では悲壮感は全く無かった。

寧ろそこにあるのは、溢れんばかりの滑稽さだ。

「ぶっ」

「くっ」

「ぶはっ」

「言っておくが！ お前らも、同じなんだからな！」

オーランドのあまりにも当たり前な指摘に、三人共が神妙な面持ちで黙り込む。

が。

「ククッ」

オーランドを見遣れば、俯いたまま肩を振るわせている。滑稽だった。

彼らの普段の姿を知っているだけに、余計滑稽だった。

だが、他の三人を笑う事は自分を笑う事でもある。

優秀な彼らは、直ぐにその事に気がついた。

「……」

誰もが屈辱に拳を強く握りしめる。

「もう、夜は明けているな……」

ふと思ひ出した様にそう言ったのは、クラリスだった。その秀麗な顔には珍しく感情が表れている。

冴え渡る様な美貌が憂える様は、さぞかし鑑賞に値する事だろう。普段なら。

その場の誰もがそう思いつつ、敢えて誰も何も言わずにクラリスから視線を逸らした。

「コホン。ええと、隠し通路に入ったのは、夜半頃だったかな」

わざとらしい咳払いの後、オーランドが言った。

それにナジャが、頷きながら答える。

「そうですね。今の季節なら、確かにもう夜は明けているでしょう。予想外の足止めに、随分と時間を食ってしまった。

直ぐさま地上に戻らねば。

彼らは立ち上がりかけ、だが同時に思った。

この顔のままで？

赤く腫れた擦り傷と黒々とした文字が、嫌になるほど目に入る。

文字は消せるが、傷は消しようもない。

だが文字もまた、大切な証拠として消すわけにはいかないのだ。

そして彼らに選択の余地はない。

「戻らねばっ。戻らねばならんのだっ」

オーランドが苦悶の表情で頭を掻き耑る。

「クソッ。とんだ恥晒しだ！」

ディンゼアが悪態をつきながら立ち上がると、渋々ながらも他の面々もそれに習った。

「戻るぞ」

クラリスの低い呟きに、皆が悲壮なまでの決意を込めて頷いた。

しかしどんなに真剣な表情を浮かべようと、どうしようもなく間抜けに見えて仕方がない。

「……」

お互いの引きつる顔に見て見ぬふりをし、彼らは来た道を無言のまま戻った。

そのジレンマの矛先が、否応もなく互いの顔を照らし出すランプの発明者に向かうのは、ある意味に於いて必然なのかも知れなかつ

た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9443m/>

---

第三王女のカエル様 小ネタ集

2011年5月23日03時55分発行